

梅花歌卅二首[并序] /		
天平二年正月十三日	萃于帥老之宅	申宴會也
天平二年正月十三日に	帥の老の宅に萃まりて	宴會を申く
天平二年正月十三日に	そちのおきなのいへにあつまりて、	うたげをひらく。
天平二年正月十三日に	帥の老の宅に集まって、	宴會を開く。
干時	初春 金 月	氣淑風 和
時に	初春の令月にして	氣淑く風和ぎ
ときに	しょしゅんのれいげつにして、	きよくかぜやはらぎ、
時は	初春のよき月で、	空氣は清く風は優しく、
梅披鏡前之粉	蘭薰珮後之香	
梅は鏡前の粉を披き	蘭は珮後の香を薰す	
うめはきやうぜんのこをひらき、	らんははいごのかうをかをらす。	
梅は鏡前の白粉ように花開き、	蘭は飾り袋の香りのように匂う。	
加之	曙嶺移雲	松掛羅而傾蓋
之に加え	曙の嶺に雲移り	松は羅を掛けて蓋を傾く
これにくはへ、	あけぼののみねにくもうつり、	まつはうすものをかけてきぬがさをかたぶく。
加えて、	曙の峰には雲が行き来し、	松の木に雲がかかり、まるで薄絹の衣笠をさしたようである。
夕岫結霧	鳥封穀而迷林	
夕の岫に霧結び	鳥は穀に封めらえて林に迷ふ	
ゆふべのくきにきりむすび、	とりはうすものにこめらえて、はやしにまどふ。	
夕べの山洞には霧がかかり、	鳥は霧に囲まれて、林を飛び回っている。	
庭舞新蝶	空歸故鴈	
庭には新蝶が舞い	空には故鴈が歸る	
にはにはしんてふがまひ、	そらにはこがんがかへる。	
庭には生まれたばかりの蝶が舞い、	空には雁が北へ帰っていく。	
於是蓋天坐地	促膝飛觴	
是に天を蓋、地を坐とし	膝を促け觴を飛ばす	
ここにあめをきぬがさ、ちをしきみとし、	ひざをちかづけ、さかづきをとばす。	
ここに天を屋根に、地を座席とし、	膝を交えて、盃を酌み交わす。	
忘言一室之裏	開衿煙霞之外	
言を一室の裏に忘れ	衿を煙霞の外に開く	
げんをいっつのうちにわすれ、	きんをえんかのそとにひらく。	
部屋の皆は言葉を忘れ、	襟を緩めて、心を開こう。	
淡然自放	快然自足	
淡然自ら放し	快然自ら足る	
たんぜんみづからゆるし、	くわいぜんみづからたる。	
心は淡々と解き放たれ、	快く満ち足りている。	
若非翰苑	何以擔情	
もし翰苑にあらずは	何をもちてか情を擔べむ	
もしかんゑんにあらずは、	なにをもちてかこころをのべむ。	
文字によらなくて、	どうしてこの気持ちが伝えられようか。	
詩紀落梅之篇	古今夫何異矣	
詩に落梅の篇を紀すも	古今それ何ぞ異ならむ	
しにらくばくいのへんをしてるすも、	ここんそれなんぞことならむ。	
漢詩に落梅を歌つたものがあるが、	それは今も昔も同じことだ。	
宜賦園梅	聊成短詠	
よろしく園梅を賦して	いささかに短詠を成すべし	
よろしくゑんぱいをふして、	いささかにたんえいをなすべし。	
さあこの園の梅を題材に、	歌を詠もうではないか。	
中西進・伊藤博等の著作を参考に、南寿宏が訳す。 家持少年は当時十代、この場を覗き見ていたであろうか。		
https://kochi-esc.sakura.ne.jp/wordpress/%e4%b8%87%e8%91%89%e3%81%ae%e5%9c%b0%e5%ad%a6/		